

検討から導入後までの流れ

STEP
01

▶ お問い合わせ

お問い合わせフォームより、ご検討中の用途やお客様の実現したいことをご相談ください。必要に応じて打ち合わせをし、機体やサービスの紹介を行います。

STEP
02

▶ オペレーション見学

ご希望に応じて、ドローンの運用方法や飛行の様子を見学いただけるデモ会に参加いただけます。(不定期開催 / 無料)

STEP
03

▶ ドローンサービス(役務)

具体的な検討のために、お客様の環境で「エアロボウイング」を飛行させ、運用イメージや成果物を確認いただく「ドローンサービス(役務)」を用意しています。お客様の業務にお使いいただけるかご判断いただけます。

STEP
04

▶ 見積の提示・ご発注

お客様の運用環境に合わせた構成の御見積書を弊社よりご提示します。ご納得いただけましたら発注書をお送りいたします。ご発注いただいた後、正式な納期を案内いたします。

STEP
05

▶ 納品・操作研修

機体の納品後、3日間の操作研修を行います。座学でドローンやVTOL型ドローンの特性について理解を深めた後、実際に機体の操作トレーニングを実施します。研修中、座学および技能の試験をそれぞれ行い、研修内容の定着度を確認します。

STEP
06

▶ 機体の定期点検・追加操作研修

運用開始後は、1年に1回 機体の定期メンテナンスをお受けいただけます。また、人事異動等によって新たに着任された方に向けた追加研修等のサポートも実施しています。

ドローン活用を検討されている方は、お気軽にご相談・お問い合わせください。



空撮後の画像解析に

画像解析サービス「エアロボクラウド」

aerobocloud.com

空撮

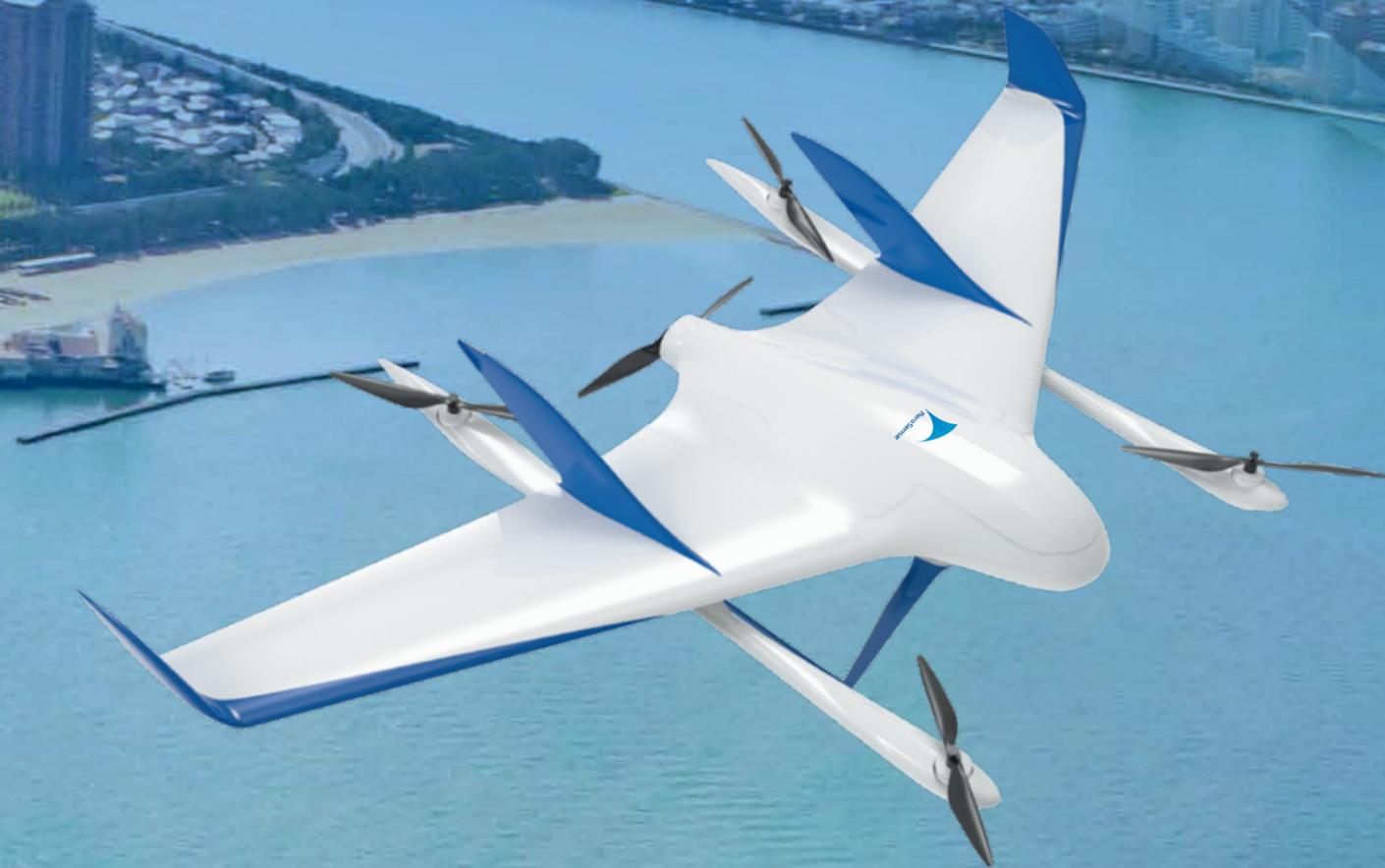
▼
解析

▼
地表モデル(2D/3D)の作成



エアロセンスの災害対策ソリューション

国産ドローンで安全・迅速な災害対策を



AERObO[®]
wing

第二種型式認証取得
垂直離着陸(VTOL)型固定翼ドローン

滑走路不要の垂直離着陸と1フライト50km、巡航速度65km/hの高速飛行が可能なVTOL型ドローン。LTE通信を採用することで、無線の到達範囲にとらわれない飛行を実現。

第二種型式認証(国土交通省)

NETIS(新技術情報提供システム)登録技術





災害発生時のドローン活用の流れ

災害発生

災害発生時には、被災状況の把握が急務です。ドローンを使用すれば、短時間で地域全体の被害の概況が把握可能です。

初動調査

発災後、ドローンを飛行させ、いち早く被災状況を把握することで救助活動や復旧計画を迅速に立案できるようになります。

復旧・復興

復旧工事等で、ドローンを定期的に飛行させて空撮し、復旧作業の進捗状況を記録し、関係者間での情報共有に活用できます。

災害発生時にドローンを使用できること

被害状況の調査



ドローンで災害現場の正確な地理空間情報を取得することで、地形の変化や被害状況を立体的に可視化します。これにより、建物の損傷状況やインフラ施設の崩壊箇所等を正確に把握できるようになります。

被災者の捜索



道路や建物の倒壊により人が立ち入ることができない孤立地域や倒壊現場での被災者捜索には、ドローンを活用した捜索が効果的です。

物資輸送



自然災害によって道路が寸断されてしまい、人が容易に立ち入れず、ヘリコプターも入りにくい状況でも、ドローンで必要な医療品等の物資を被災者に届けることができます。

エアロボウイングが変える災害対応

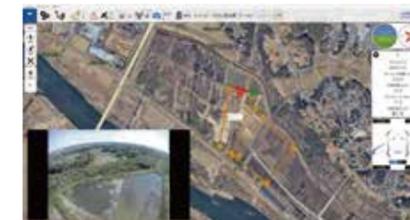
▶ 長距離・広範囲の調査能力

VTOL 型ドローンは通常のマルチコプタータイプのドローンと比べ、長距離かつ高高度での飛行が可能です。これにより広範囲の被災地の調査が可能で、迅速に情報を収集することができます。VTOL 型ドローンを活用することで、マルチコプタードローンの飛行性能では到達できなかった地域の状況まで把握することができますようになります。



▶ 全自動飛行で安定した運用が可能

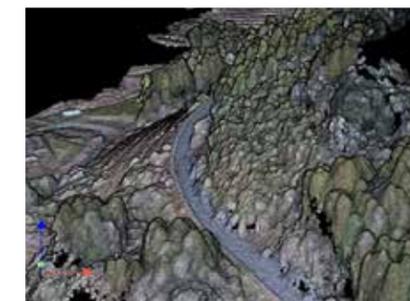
エアロセンスのドローンは、全自動で飛行するため操作が非常にシンプルです。緊急時は、マルチコプターモード(*)に切り替えることで、手動で操作ができます。また、飛行経路の計画は、研修時に専用シミュレーターを使用し、繰り返し練習することができるため、十分トレーニングを重ねた上で実地オペレーションに臨めます。



(*) 4つのローター（回転翼）を使用して飛行するモード

活用事例

▶ 災害発生時の特定道路等の状況調査 (2024年1月/ 石川県(能登半島地震))



空撮で取得した写真は、画像解析サービスを使用し、大きな地表面の平面モデル(オルソ画像)、立体モデル(3D点群)を作成することが可能。作成したオルソ画像から、路面の陥没やひび割れなどの状況把握することができます。

▶ 災害時を想定した砂防周辺施設の点検実証 (2024年9月/ 長野県)



平面モデル(オルソ画像)は、各地点を拡大表示させることができるため、詳細な地上の状況の把握が可能になります。平面モデルの素材となった各空撮写真の撮影位置情報等は、オルソ画像上でも確認ができます(中央写真の旗型アイコン)。

搭載可能なカメラの例



静止画カメラ UMC-R10C

レンズ交換式の大型レンズを用いて
毎秒2000万画素の撮影が可能。



動画カメラ PVL-8K

ジンバルでカメラの方向を操作しながら
安定した4K動画を撮影。